

## 英米のドラマ教育の考察 (9)

—イースタン・ミシガン大学大学院子どものためのドラマ／演劇 MFA プログラムにおける「インターンシップ」の教育的意義—

小林 由利子

Drama Education in UK and USA (9): The Educational Meaning of “Internship” in The MFA Program of Drama/Theatre for the Young in the Graduate School of Eastern Michigan University

Yuriko Kobayashi

### 要旨：

幼稚園教員養成課程において平成31年度から「学校インターンシップ」という新しい科目が導入される。この科目を検討するためにイースタン・ミシガン大学「子どものためのドラマ／演劇 MFA プログラム」における「インターンシップ」という科目に着目した。本論の研究目的は、「インターンシップ」という授業が、学生にどのような経験を与え、学生が何を学んだかを明らかにする。具体的には、「子どものためのドラマ／演劇 MFA (Master of Fine Arts) プログラム」における「インターンシップ：子どものための演劇」を受講した著者が経験した事例を取り上げて検討する。結果は、次の4つである。第1に、学生が自ら理論と実践の隔たりに気づけることである。第2に、学生が体験的に自らの興味と関心の分野について気づき、将来の方向性を絞り込めることである。第3に、学生が将来、どのような職につきたいかを明確化できることである。第4に、さまざまな体験を通して、学生がドラマ教育と児童演劇分野で求められる技能を知らず知らずのうちに獲得できると同時に、次に何を学び、どのような技術を修得しなければならないかを明確化できることである。今後は、日本の「学校インターンシップ」の可能性について検討していきたい。

### キーワード：

ドラマ教育 児童演劇 プログラム インターンシップ

## 1. はじめに

文部科学省初等中等教育局教員課による「教育職員免許法・同施行規則の改定及び教職課程コアカリキュラムについて」(2017)において、教員養成内容の改革の一つとして「学校インターンシップ」の導入が示されている。この具体的内容として、「○児童、生徒等の話し相手、遊び相手 ○授業補助 ○学校行事や部活への参加 ○事例作業の補助 ○放課後児童クラ

ブ、放課後教室、土曜授業 等」(文科省, 2017)があげられている。「学校インターンシップ」の実施期間として、「教育実習よりも長期間を想定(ただし、一日当たりの時間数は少ないことを想定)」(文科省, 2017)している。「学校インターンシップ」の受け入れ側の学校の役割として、「学生が行う支援、補助業務の指示(教育実習のように、学生に対する指導や評価は実施しない)」(文科省, 2017)としている。現在、各教員養成大学は、どのように「学校イ

ンターシップ」を実施するか検討している状況である。

そこで本論では、著者が実際に経験した1984年に設置されたイースタン・ミシガン大学大学院「子どものためのドラマ／演劇 MFA (Master of Fine Arts) プログラム」における「インターシップ：子どものための演劇」の授業に着目する。本論の研究目的は、イースタン・ミシガン大学「子どものためのドラマ／演劇 MFA プログラム」の「インターン：子どものための演劇」が、学生にどのような経験を与え、学生が何を学んだかを明らかにすることである。研究方法は、事例研究である。具体的には、「子どものためのドラマ／演劇 MFA (Master of Fine Arts) プログラム」における「インターシップ」の授業を受講した著者の経験した事例を取り上げて検討する。考察は、ヴァージニア・グラスゴー・コウステイ (Virginia Glasgow Koste)<sup>2)</sup> の「遊び／ドラマ／演劇連続体」の考え方の視点から考察する。本論で取り上げる「インターシップ」は、「CTA<sup>3)</sup> 686 Internship-Theatre for Young」(1単位)、「CTA 687 Internship-Theatre for Young」(2単位)、「CTA 688 Internship-Theatre for Young」(4単位)の3科目である。

## 2. イースタン・ミシガン大学大学院演劇学研究科「子どものためのドラマ／演劇 MFA プログラム」について

当時、この MFA プログラムは、主任教授であったコウステイの「遊び／ドラマ／演劇連続体 (Play/Drama/Theatre Continuum)」の考え方に基づきプログラムが構成されていた。コウステイは、演劇作品の上演を目的にした演劇 (theatre) と上演を目的にしない演じること自

体を目的にしたドラマ (drama) のルーツは、子どもの劇的遊び (dramatic play) であると位置づけていた。コウステイは「ドラマと演劇」という芸術は、子どもの自然な劇的遊びにルーツがあり、程度の差こそあるが同じ連続体上に存在している」(Koste, 1987, p.xviii) と述べている。つまり、レベルの差はあるが、子どもの遊びとドラマと演劇は分かちがたく連続している、ということである。さらに、コウステイは、「演劇経験は、ある意味、遊びを高めたり、発展させたりしたものである」(Koste, 1987, p.xviii) と考えていた。コウステイのいう「劇的遊び」とは、何らかの見立て、あるいは変身のある活動のことを指す。つまり、子どものごっこ遊びのことである。コウステイは、人間にとってこの劇的遊びが、最も重要であると考えていた。なぜならば、コウステイはこの遊びが、人間の創造的活動のもとになると考えていたからである (Koste, 1987, p.ix)。

イースタン・ミシガン大学大学院「子どものためのドラマ／演劇 MFA プログラム」には、次のような科目が設定されていた。たとえば、「人間経験におけるドラマと遊び (Drama & Play in Human Experience)」、「子どものためのオーラル文学とリーディング (Oral Literature & Reading)」、「クリエイティブ・ドラマとロール・プレイ (Creative Drama & Role Play)」、「アドバンス・インプロビゼーション (Advanced Improvisation)」、「子どもの観客のための巡回公演 (Touring to Young Audience)」、「パペトリー：人間発達におけるカタルシス (Puppetry: Catalyst Human Development)」、「児童演劇入門 (Introduction Theatre for Young)」、「劇作と子どもの観客 (Playwright & Young Audience)」、「ディベロップメンタル・ドラマ／演劇 (Developmental

Drama/Theatre)」、「演劇フェスティバルと見本市 (Theatre Festival & Showcases)」、「子どものためのドラマ／演劇研究 (Study of Drama/Theatre for the Young)」、「インターシップ：子どものための演劇」等である。

「人間経験におけるドラマと遊び」は、MFAプログラムにおける基礎的な科目である。子どもの遊びとドラマについてさまざまなアクティビティを体験し、コウスティの著書である『子ども時代の劇的遊び：生活／人生のリハーサル (Dramatic Play in Childhood: Rehearsal for Life)』(1978)における劇的遊びについての理解を深めていく授業であった。学生はこの授業でコウスティの基本的考え方を体験的・理論的に学べるようになっていた。

「子どものためのオーラル文学とリーディング」は、口頭によって伝承されてきた物語を朗読する経験である。著者がこの科目を受講したときは、セラピー的ドラマのカンファレンスが、イースタン・ミシガン大学で開催され、その一部として授業で制作したオーラル・インタープリテーションの作品を上演した。オーラル・プリテーションは、朗読に最小限のアクションを付け加え、観客に向かって語りかけていくスタイルの演劇である。

「クリエイティブ・ドラマとロール・プレイ」は、クリエイティブ・ドラマとは何か、ということについて学び、学生がクリエイティブ・ドラマの活動を立案し、模擬授業を行い、振り返りをする授業であった。つまり、アメリカで20世紀初頭にはじまったクリエイティブ・ドラマの理論と実践を学ぶ授業である。

「アドバンス・インプロビゼーション (Advanced Improvisation)」は、コウスティが子どもの遊びの要素を取り上げて再構成したシアター・ゲームをコウスティのファシリテーター

トにより、学生たちが実際に体験し、振り返り、レポートを書く、ということを繰り返す授業であった。たとえば、「ジャンピング・グリーティング」というインプロビゼーションは、参加者がジャンプをしながらグループの人たちと握手をして自己紹介をする活動である。このことから、日常で行っているジャンプすることと、挨拶することを組み合わせ、日常とは異なる世界をつくることができる、ということを経験的に学べる。つまり、遊びという想像世界をゲームという枠組みを通して体験する。

「パペトリー：人間発達におけるカタルシス」は、クリエイティブ・パペトリーと人形劇の上演を組み合わせた授業であった。初期段階は、簡単なパペットをその場で制作して演じてみる。次に口の動くマペットを制作し、即興的に演じてみる活動を行った。最後に短い人形劇を制作し、上演する内容であった。

「児童演劇入門」は、児童演劇とは何かについて学び、実際に児童演劇作品を鑑賞し、討議する授業であった。児童演劇には、どのような特徴があり、どのようなスタイルがあるかについて学ぶ。そして、一般のおとな向けの「優れた演劇のすべての原理は、児童演劇と同じように該当し、むしろ、それ以上でなければならない」(Rosenberg, 1983, p.10)、ということの重要性について考える授業であった。ここでいう児童演劇とは、子どもという観客を対象にして、プロのおとなの俳優が、演劇作品を上演することである。

「ディベロップメンタル・ドラマ／演劇」は、クリエイティブ・ドラマのようなドラマをすること自体を目的にしたディベロップメンタル・ドラマと上演を目的にした演劇とのつながりについて考える授業であった。特に、イースタン・ミシガン大学大学院のMFAプログラムは、

コウスティの「遊び／ドラマ／演劇連続体」の考え方に基づいているので、この考え方を理論的に学ぶ授業であった。

「劇作と子どもの観客」は、児童演劇の脚本を読み、考察する授業であった。課題としては、必読しなければならない脚本と自分で選択した脚本とがあった。多数の脚本を読み、最後に学生一人一人が短い脚本を書き、配役をして、リーディングを行い、お互いに講評した。これらのことを通して、脚本とは何か、脚本を書くためにはどうしたらいいか、等について学んだ。

「子どもの観客のための巡回公演」は、演出家と学生である俳優が、ワークショップを通してオリジナルな演劇作品を制作し、近隣の小学校へ巡回公演する授業であった。舞台は、子ども同士がお互いに見え、俳優との距離が近くなる円形舞台であった。通常、観客数は、100～250名程度であった。各学期中に週2回巡回公演を実施していたので、50回以上の児童演劇公演の経験ができるようになっていった。実際に児童演劇作品を制作し、リハーサルを重ね、子どもの観客の前で演じる経験を通して、児童演劇についての理解を深め、児童演劇作品を演じるための技術を体得できるように授業が構成されていた。

「演劇フェスティバルと見本市」は、実際に子どものための演劇フェスティバルの調査を実施し、レポートを作成する授業であった。フェスティバルで一度に多数の児童演劇作品を鑑賞することにより、質の高い作品とは何か、多様な演劇スタイル等について考える機会になった。この授業は、楽しみながら学べるという体験になった。

「子どものためのドラマ／演劇研究」は、ドラマ教育と児童演劇の主要な人物の論文を講読し、討議する授業であった。イギリスのDIE

(Drama in Education) の先駆者であるイギリスのピーター・スレイド (Peter Slade)、ドロシー・ヘスカット (Dorothy Heathcote)、ギャビン・ボルトン (Gavin Bolton) の理論と方法論にして検討した。さらに、アメリカの主要なクリエイティブ・ドラマ・リーダーであるウィニフレッド・ウォード (Winifred Ward)、ジェラルディン・ブレイン・シックス (Geraldine Brain Siks) の理論と方法論についても検討した。

これらの授業の単位を取得した後に学生は、「子どものためのドラマ」あるいは「子どものための演劇」の2分野から一つを選択し、課題図書を読み込み、1日かがりの記述式テストを受験し、合格したら「インターンシップ：子どものための演劇」を受講することができた。

### 3. 「インターンシップ：子どものための演劇」の検討

学生は、「インターンシップ：子どものための演劇」の研修先を探し、交渉し、インターンシップを実施しなければならなかった。著者は、第1にボストンにあるアドバン小学校付属ウィンドー・プログラムという学童保育施設と児童劇団、第2にカールトン・カレッジ (Carleton College) 教養学部演劇プログラム客員教授助手、第3にカナダのカレイドスコープ劇団の日本人の演出家の通訳と助手、という3つの「インターンシップ」を受講した。

#### (1) ボストンにおける「インターンシップ」 「CTA 688 Internship-Theatre for Young」(4単位)

ボストンには、イースタン・ミシガン大学大学院「子どものためのドラマ／演劇プログラ

ム」の修了生であるロバート・コービー (Robert Colby)<sup>4)</sup> が、エマーソン・カレッジ (Emerson College)<sup>5)</sup> 演劇学部ドラマ教育プログラムの教授をしていた。指導教員であったコウステイは、著者にコービーのもとで子どものためのドラマ／演劇をさらに学び、コービーの妻がディレクターをしているエマーソン・カレッジに近いアドバン小学校付属ウィンドー・プログラム (子どものための芸術文化プログラムの学童保育) で働くように勧めた。さらに、コービーから、ボストンにある児童劇団でも働くように勧められた。したがって、1985年9月から12月までボストン市内の3か所でインターンをするようになった。

エマーソン大学大学院教授であるコービーは、1年間イギリスのヘスカットのもとで学んだ経験があるので、彼の授業はイギリスのDIEにもとづく内容であった。イースタン・ミシガン大学大学院でコウステイから学んだ内容とは異なるので、非常に戸惑いがあった。しかし、コービーは同窓であるので、大学院生だった著者にとって、彼は著者のモデルとなる存在になった。さらに、イースタン・ミシガン大学大学院とは異なるドラマ教育の考え方を学ぶ機会にもなった。コービーの週1回のチュートリアルも受講できたので、自分の現在かかえている問題を話すこともできた。

今でも非常に印象深く記憶していることは、コービーが児童演劇作品を演出しているリハーサルにおいて、生の魚を小道具として使用してことである。チュートリアルで「なぜ、生の魚を使ったのか、虚構の世界なのでから生でなくていいのではないかと質問したときに、いつもは穏やかなコービーが声を荒げて反論したことである。そのことについて、10年以上たってから、「生である必要はなかった」とコービー

から言われたときは本当に驚かされた。「インターンシップ」とチュートリアルを組み合わせる意義を実感した。

インターンシップの経験は、大学で学んだことについて、別の価値観と出会い、確かめる機会になると考える。いいかえれば、大学内では同じ教員から学んでいるので、類似した考えをもつようになっていくので、異なる考えに遭遇することにより、新しい視点から物事を考えられるようになる。コービーとは同窓であったため基盤として同じ考えを持っていた。コービーは、それを基盤にして彼独自のドラマ教育の理論と方法論を発展させていた。ここから、自分の未来像をイメージすることができた。このようなことを体験的に学べるのが、「インターンシップ」の教育的意義であると考えられる。

ボストンのビーコン・ヒルにあるウィンドー・プログラムという学童保育において、子どもたちに日本文化を教えたり、一緒に料理をしたり、散歩に行ったり、さまざまな活動をしたりした。ここでも、イースタン・ミシガン大学大学院で学んだことを実際の現場で試行する機会になった。自分の中では、理論に基づき子どもたちと一緒に楽しく活動したいと考えても具体的な活動として結びつけられなかった。そして、他の職員が行っていることは、大学院で学んだことにつながらないので、批判的に観察していた。この経験は、大学院で学んだことを具体的にしていくには、技術が必要である、という気づきになった。また、インターンとしての構えについて考えさせられる経験にもなった。さらに、自分は小学生ではなく幼児に興味がある、ということを実感する機会になった。つまり、体験を通して、自分の興味のありかを実感できた。「インターンシップ」は、自分では気づけなかった興味と関心のありかを体験的

に知らせてくれる機会であると考える。

ボストンにある児童劇団から派遣されブルックラインにあるリンカーン幼稚園において、幼児とクリエイティブ・パペトリーの活動を行った。具体的に、スティック・パペットを子どもと一緒に製作し、それを使って簡単な人形劇を試してみる、という活動であった。幼児は、すぐに飽きてしまい5分もたたないうちに担任の先生のところへ戻って行ってしまった。翌日、その担任から、子どもたちは別の活動をさせたいから、といわれてしまった。これは、幼児とのクリエイティブ・パペトリーの活動について、自分の活動のイメージと実際の幼児との姿とのギャップに気づく経験になった。

このように「インターンシップ」を通して、理論と実践に隔たりがあることを体験的に学べるといえる。そのときにメンターが存在することが重要である。当時、メンターとしてのコピーのチュートリアルを受講できたことが、「インターンシップ」の学びを深めたと考える。

## (2) ミネソタ州のカールトン・カレッジにおける「インターンシップ」[CTA 686 Internship-Theatre for Young] (1 単位)

イースタン・ミシガン大学演劇学部教授のロバート・マックエリア (Robert McElya) は、歌舞伎の技法を使う演出家であった。イースタン・ミシガン大学劇場での定期公演でマックエリアが、スペインの劇作家であるガルシア・ロルカの『血の結婚式』を歌舞伎スタイルで演出したときの演出助手をした。そのことがきっかけでマックエリアが、2016年2月～3月までミネソタ州のミネアポリスの郊外にあるカールトン・カレッジ (Carlton College)<sup>6)</sup> の演劇専攻の客員教授として招かれたときに演出助手として「インターンシップ」を受講できることに

なった。マックエリアは、『羅生門』を歌舞伎スタイルで演出することになり、その演出助手を担当した。カールトン・カレッジの演劇の授業も聴講することができ、アメリカの小規模なリベラル・アーツ大学について知る機会にもなった。60名が最大規模のクラスの人数であった。この時の経験が、大学における少人数クラスの重要性について考えるきっかけになった。

カールトン・カレッジの「インターンシップ」の経験から、自分はおとな向けの演劇作品の演出より、演劇を観て批評することには興味を持っていくことを自覚できた。

このように「インターンシップ」は、さまざまな体験を通して、自分の興味と関心のありかを実感でき、将来の方向性を絞り込む機会になる。

## (3) カナダのカレイドスコープ劇団における「インターンシップ」[CTA 687 Internship-Theatre for Young] (2 単位)

カナダのプリテッシュ・コロンビア州ビクトリア市にある非営利活動法人であるカレイドスコープ劇団は、日本の著名な演出家である関矢幸雄を招聘して、日本の神話にもとづく作品を制作することになった、という情報を得た。そこで、通訳として「インターンシップ：子どものための演劇」を受講できないかと考え、カレイドスコープ劇団に履歴書と推薦書を送付した。運よく採用されたので、1986年3月～5月までカナダに行くことになった。

関矢の演出は、物語とアイデアを書き込んだメモと俳優とのワークショップにより、作品を創作するやり方であった。演出家の通訳は、想像以上に難しく、困難であることに「インターンシップ」を始めてから実感した。さらに、演出家という仕事のおもしろさと同時に難しさ

も観察することができた。最も印象に残っていることは、演出家と作曲家との会議を通訳したことであった。演出家は、作曲家の作った音楽が場面に合っていないと指摘し、音楽家はそれに気づいているが認めて変えたくない、という状況であった。このニュアンスを翻訳することは、非常に困難であった。リハーサルの際に演出家が即興的に発想したことを通訳して俳優に伝えることも簡単ではなかった。

この「インターンシップ」においては、演出家がどのように作品を演出していくかを始めから終わりまで、経験することができた。演出家が、作品を演出するときの楽しさと苦悩について、プロの演劇人とは何かということについて、通訳することを通して実感できた。そして、関心のクリエイティブな演出を観察し、自分はプロの劇団で働くより、大学でドラマ教育と児童演劇を教えてみたい、と自分の目標を明確化できた。

イースタン・ミシガン大学大学院の「インターンシップ：子どものための演劇」という授業は、自分自身が何に興味と関心を持っているのかを身体を通して教えてくれた。それは、座学の授業だけでは経験できない、ボディとマインドを往還しながら、直観的な仕方理解を導き出す教育方法であると考えられる。

#### 4. おわりに

イースタン・ミシガン大学大学院子どものためのドラマ／演劇 MFA プログラムにおける「インターンシップ：子どものための演劇」は、次の4つの教育的意義があると考えられる。第1に、学生が自ら理論と実践の隔たりに気づけることである。第2に、学生が体験的に自らの興味と関心の分野について気づき、将来の方向性を絞

り込めることである。第3に、学生が将来、どのような職につきたいかを明確化できることである。第4に、さまざまな体験を通して、学生がドラマ教育と児童演劇分野で求められる技能が知らず知らずのうちに獲得できると同時に、今後何を学び、どのような技術を修得しなければならないかを明確化できることである。

今後は、現在の日本の「学校インターンシップ」の可能性について検討していきたい。

#### 注

- 1) MA (Master of Arts) プログラムは30単位、MFA (Master of Fine Arts) プログラムは60単位である。現在このプログラムは、Master of Fine Arts in Applied Drama & Theatre for the Young と名称と内容を変更している。子どものためのドラマ／演劇は、学部生対象のマイナー・プログラムとして継続されている。
- 2) ヴァージニア・グラスゴー・コウステイ (Virginia Glasgow Korte) は、両親が俳優の家庭に生まれた。幼少期より演劇の中で育ち、生涯にわたって演劇と教育にかかわった。1968年よりイースタン・ミシガン大学で教授、脚本家、演出家であった。専門は、児童青少年演劇とクリエイティブ・ドラマである。ヴァッサー大学で演劇を学び、ウェイン州立大学、コーネル大学、インディアナ大学、ノースウェスタン大学等の大学院で学んだ。同時に俳優としても活躍した。デトロイト市内のナースリー・スクール、ウェイン州立大学、デューク大学、フロリダ州立大学を経てイースタン・ミシガン大学で1985年まで学生を指導した。イースタン・ミシガン大学名誉教授である。
- 3) CTA は、Communication、Theatre Arts の略である。
- 4) ロバート・コービー (Robert Colby) は、エマーソン・カレッジ舞台芸術学部教授であり、大学院の主任教授であり、教育研修のコーディネーターである。コービーは、ミシガン大学を卒業後、イースタン・ミシガン大学大学院「子どものためのドラマ／演劇 MA プログラム」を修了し、ハーバード大学大学院で博士号を授与された。専門は、演劇教育、児童青少年演劇と演出である。演出作品

は、ニュー・イングランドを巡回公演している。

- 5) エマーソン・カレッジ (Emerson College) は、1880年創立の舞台芸術を実践的学ぶことで有名な4年生大学である。1919年にアメリカで最初に子どものためのシアターを設立した。
- 6) カールトン・カレッジ (Carlton College) は、1966年創立の中西部の名門のリベラル・アーツの単科大学で、学生数は2000名である。

#### 参考・引用文献

- 小林由利子 (2008) 「日本の演劇教育の多義性—英米のドラマ教育の視点から—」『東横学園女子短期大学紀要』48 46-56.
- 小林由利子・中島裕昭・高山昇・吉田真理子・山本直樹・高尾隆・仙石桂子 (2010) 『ドラマ教育入門』図書文化.
- Koste, V.G. (1878) *Dramatic Paly in Childhood: Rehearsal for Life*. New Orleans: Anchorage Press.
- McCaslin, N. (2006) *Creative Drama in the Classroom and Beyond*. 8<sup>th</sup> ed. New York: Person.
- 文部科学省 (2017) 「教育職員免許法・同施行規則の改定及び教職課程コアカリキュラムについて」.
- 岡田陽・落合總三郎監修 (1984) 『玉川学校劇辞典』玉川大学出版
- Rosenberg, H.S. (1987) *Creative Drama and Imagination: Transforming Ideas into Action*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- Rosenberg, H.S. & Prendergast, C. (1983) *Theatre for Young People: A Sense of Occasion*. New York: Holt, Rinehart and Winston.
- 佐野正之 (1981) 『教室にドラマを！ 教師のためのクリエイティブ・ドラマ入門』晩成書房.